

「りゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に伺う。という気持ちでお届けしています。



# りゅうま伝

35号  
2022年10月26日  
高野 竜馬

「小学校で一番の...」

「お父さん、小学校の一番の思い出って何なん？」現役小学校2年生の息子に訊かれてドキッとした高野です。

昔あるセミナーで似たような質問を受けたことがあったので、すぐに答えられました。皆様はどうでしょうか？

それは4年生の夏。学年全体での水泳大会のことです。僕の通った学校では25メートルを泳げば合格なのですが、出来る人は100m泳いでも良いという変わったルールでした。

当時はスイミングスクールに通っている子も少なく、僕が限り学年で一人、シノハラ君だけだ、たと記憶しています。僕はというと「市政だより」に

載っていた子ども水泳教室に親が応募して当選。教回通っただけの超我流クロール。今にも溺れそうな大げさな息継ぎのクロールです。

ただ何故か挑戦心だけは子どもの頃からありました。25m泳げない子が大半の中、勇気をもって25mをターン。

するとターンをする度に歓声が上がるのです。それも泳いでいるのか？溺れているのか？見分けのつかない動きですが、から見ている方もハラハラしたことでしよう(笑)。

そして最後100メートルを泳ぎ切ると、スゴイ歓声と拍手が巻き起こったのです。僕は自分が泳ぎ切った達成感よりも自分のことで沢山の人が

こんな喜びが娘が不思議でした。そして僕はプールサイドに上がって肩で何度も息を吐いていたこと、空がとても青かったこと、父がとても誇らし気にその夜、誉めてくれたことを息子に話しました。

結果、学年で100m泳いだのは2人だけで、もう一人はシノハラ君。彼はかっこいいフォームで悠々と100mを泳ぎ切ったのです。それはまるでオリンピック選手のように美しく見えたものです。回りの反応も全然違いました。「息を吞む」という表現がまさにピッタリ。スゴいものを見ると人は黙るので、泳ぎ切った後の拍手もクラシックの音楽会で聞くような爽やかな拍手でした。

さて、私が受講したセミナー講師によると、10歳までの間に経験した「嬉しかったこと、楽しかったこと」は、その後の人生に大きく影響を及ぼすと習いました。それは些細なもので、良いそうです。

その時の「プチ成功体験」で得た感情を追い求めて行動すること、成功の力ギとなるのだという話でした。

私が遅くともマラソンや110kmウォークに挑戦したのも、それを追体験したかたのかもしれない。水泳大会の記憶は、不格好でも自分は「これで良いのだ」と思わせてくれます。



たかの財形事務所  
〒819-0374 福岡市西区千里 707-13  
☎090-3407-2123  
<https://www.takanozaikei.com> メール fp.takano@gmail.com

「りゅうま伝」の題字は娘(当時9歳)が書いてくれました。